

夕日と拳銃

檀 一 雄 著



夕日と拳銃

亶 一 雄 著



銃拳と日夕

昭和三十年十二月二十一日 印刷
昭和三十年十二月二十五日 發行

定價 貳百五十圓
地方賣價 貳百六十圓

著 者 檀 一 雄

發行者 東京都新宿區矢來町七一番地
佐 藤 亮 一

發行所 東京都新宿區矢來町七一番地
株式會社 新 潮 社

電話東京三四局代表七一(八一)
振替東京 八〇八番

亂丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へ致します。

印刷 扶桑印刷株式會社

製本 新宿 加藤製本所

Printed in Japan

目次

日の出前……………七

菊の門……………三

将軍……………五

暗い夏休……………七

地の果て……………一〇五

城

門

.....一九

弾

丸

.....一五四

人

の

子

.....一八〇

キ

リ

ギ

リス

.....

.....二〇五

熱

い

血

.....三二

裝
幀

富
取
風
堂

夕
日
と
拳
銃

日の出前

高輪の伊達邸では、九州から上京したばかりの若様の噂でもちきりだ。ちょっとしたブームである。

「あの若様がたった十三になるやならずだなんて、とっても考えられないわ。見上げるようにおみ大きくていらっしゃる」

「それに、眼がギョロリと光って、まるで上野の西郷さんそっくりね」

「やっぱり御先祖様の血は争えないものね」

「この寒いのに久留米絣のツツッポよ。足袋もおはきにならず、太いシュロ緒の朴齒下駄。袴はまるで肩からブラ下げて、それでノコノコ三等車から降りていらっしゃったんですって」

「まあ、今しがたもね、お床をのべてさし上げたたら、毎晩この場所に敷くかとおっしゃるでしよう。いいえどうでもお宜しゅうございますと申し上げたところ……オホホ」

「あら、どうしたの？」

「毎晩一分一厘違わぬところに敷いてくれですって」

「どういうワケ？」

「どういうワケか、あたしも不思議でしょう。すると若様は、その布団の上にゴロリと仰向けにな

られて、信玄袋を取ってくれとおっしゃるのよ」

「信玄袋？」

「信玄袋の中はたった一挺のピストルだけ。そのピストルをお握りになるでしょう。あたしビックリしちゃった」

「そうして？」

「それから、そのピストルで長いこと天井をねらっていらっしたけどね」

「ええ」

「今度は踏台と硯と墨を持って来いっておっしゃるの」

「へえー」

「そこで踏台と硯と墨をお持ちしましたらね、それからが大変」

「どうしたの？」

「布団の上に机を置き、机の上に踏台を重ね、その上に、筆を握ったままお登りになってね」

「ええ、ええ」

「何をなさるのかと思っていたら、マトよ。天井に二重丸を描いておしまいになったわ」

「まあー、大目玉よ」

「だって、どうしようもないんですもの。何をなさるかと思っているうちに、一遍にもうクログロと描いておしまいになったんですもの」

「まさか、お撃ちになるのじゃあるまいね。あそこのお二階はお納戸の筈だけど、でも一度申し上げとかなないと後で大変よ」

「そうね」

「とに角、大変な暴れん坊の若様だわ。でもおもしろそうね」

翌朝の午前四時だ。まだシンと寝しずまっている広い邸内の、廊下の雨戸が一枚だけあけられた。

ヒラリとハダシのまま跳び降りたのは、例の話題の人物のようである。こんもりと茂り合った庭園のここかしこをまるで探検をでもするようにうろつきまわっているようだ。

ようやく明けはじめた。霧がたっている。

その霧に中につっ立っている少年は、なるほどデカイ。右手に時代がかった大型のスミス・アンド・ウェッソンを握りしめて、その手をまっすぐにさしのばしたままだ。

左手は無造作にヨレヨレの兵児帯に親指をかけている。柄の大きな久留米紵のツツポだ。樺の大木のウロの中をいつまでもねらっている。

霧に暗闇が見えてきた。やがて五発、

ズドン・ズドン

硝煙が濛々と少年のまわりにたてこめる。

いくら広い邸と云ったって、朝っぱらからピストルをぶっ放したんでは騒ぎが起らないほうが不思議である。

「あれは何じゃ？」

「あれは何じゃ？」

御隠居の時宗伯が持前のカンベキ声になって、奥の離れ座敷から呼んでいる。

「ハッ。何か銃砲の音のようにございましたか」

「バカ。何処で、誰が、何の為に発砲しておるのじゃと聞いておる」

「ハッ。早速取調べて見まするが」

「早くせい、早く。イクサならばもうこちらが全滅というところだぞ」

白髯の時宗伯が太刀をひつつかんで廊下によろけ出したのは、さすがに常在戦場の伝統の心意気のようなのである。

しばらく大声に呼び交わして邸内を右往左往する人々の足音が聞えていたが、やがてヒソヒソとなり、その声もしずまって、

「恐れながら、申し上げます」

「ウム、何事であつたかな？」

「ハイ、やっぱりピストルの射撃練習のようでございます」

「うちの庭でか？」

「左様にござります」

「してまた、誰だ？」

「ハイ、昨晚お着きの若様のようにございました」

「何。麟之介？」

「ハ、ハイ」

「タワケモノ奴が。すぐ、ここに呼んでこい」

「かしこまりました」

ようやく霧は晴れわたった。庭先の樹々にまぶしいほどの早春の陽ざしが当たっている。

その庭先の芝生を踏んで、例のハダシの少年が書生に案内されながら、ノッソリとやってきた。右手には相変らず大きなピストルをぶら下げたままだ。

「こら、鱗之介」

「ハー」

「昨夜ついたというのに何故ワシのところに挨拶に来んか？」

「セカラシカローち（面倒だろうと）思いました」

「誰が？」

「おジ様がですタイ」

「バカ。挨拶というものは首がふっ飛ぶ時でも、キチンキチンとするもんだ。間もなく、お前も学習院に入るのだぞ。朝、ワシのところへ来る時には、お早うぐらいは云いなさい」

「お早うございまっする」

「うん、お早う。……そこでだが、朝っぱらから、何をやっとなった？」

「ピストルですタイ」

「何の為にやっとなった？」

「練習ですタイ」

「練習はわかつとる。何の目的でピストルの練習をやっとなったのか？」

「悪か奴バ、撃つとでしようもん？」

「アハハ、一タン国に大事がある時にじゃ、その、お国の為に撃つのじゃぞ」

「ハー、そげんです」

「お前はまだ年ハが行かん。いいか。是非善惡の区別がつかん。間違うても人に向けては相ならんぞ。まだ腕も魂も、亀ノ子一匹しとめることが出来ぬモンじゃ」

「ハー」

「しかし、ピストルを稽古するなどは云わん。ピストル、馬、学問……遠祖政宗公も騎馬鉄砲の名人じゃ。そこで、毎朝六発ずつの練習を許すから、池のこちらから必ず築山の方に向って撃つがいい」

人一倍カンベキの強いおジ様が、九州の山の中からポッと出のこのおかしな孫に、何となく思召しでもありそうなのは不思議である。

毎朝ズドンズドンという発砲の音に、きまって一度はビックリとはね起きて、床の中に備前福岡一文字をひきよせるが、

「ハハーン。やつとる、やつとる」

風変りな孫のツラツキ身のこなしを思い浮べると、何やら伊達家の警固万全のような安堵が湧き、それからトロトロと一寝入りがするのが楽しみだ。

またそのトロトロと心地よい朝寝のあとで、家中の不心得者どもをコッピドク叱ってまわるのがおもしろい。

「オイ、斎藤。廊下の垂木から蜘蛛の糸が垂れとるぞ」

「は？」

「見えんのか？ 貴様は伊達の家をムササビモモンガーの巣だとも思っておるだろう」

「め、滅相な。御前様」

「垂木から蜘蛛の糸が垂れるようでは、第一、御先祖様に対して相済まん」

「はい」

「掃除の良不良の問題ではないぞ。精神の置きどころの問題じゃ」

「ハ」

「庭下駄をなぜキチンと揃えておかぬ？」

「ハ」

「秀吉が信長の草履を取っておった頃はな、毎朝自分のふところであぐまにいたぐらいの心使いじゃ。ん？ ならばぬが問題じゃない。ならべるその心使いの問題じゃ」

まことに台風一過。

そこそこに直立する女中、書生らの間を、常在戦場の意気で通過し終ったと見えたが……、急に立ちどまる。

「時に麟之介の部屋は何処にした？」

「東の間でございます」

居ならぶ女中、書生らの眼と眼が素速い火花を散らし、サッと青ざめるように見えた。

「ちょっと見廻ってみるか。あいつは滅法早いようじゃな？」

「ハ。毎朝四時頃にはキチンとお目覚めのようでございます」

「うむ。大志を抱いておる者は大よそ、その位の時間に布団を蹴ってはねおきるもんじゃ」

機嫌よく部屋に入って、たった一つしかない孫の所持品の信玄袋の重みなどおもしろそうにはか
つていたが、ふっと眼が上向いた。

「あ、あれは何じゃ？ あ、あの天井は？」

例の天井の二重丸を眺めあげてうめき声になる。

「申し訳ございません。若様がアッというひまもなく描いておしまいになったものらしゅうござい
ます」

「な、なにを描いたのじゃ、なにを？」

「ピストルの標的らしゅうございます」

「な、なに、ピストルの標的？」

さすがの常在戦場伯爵も顔色蒼白、アリアリと苦悶の表情が見てとれた。

「いいか。標的は戸外にとらせろ。戸外……」

吐いて棄てるように云って、足取危なく座敷の大広間の方に抜けてゆく。

その縁近くによりやく坐りこみ、しばらく自分の気持をとりしずめるように、ふるえる手付で敷
島を手にとった。

側からマッチが点火される。

その煙をくゆらしながら広々とした庭を眺めやった。泉石の上に沢山の亀の子がのっている。

さすがに名家のお庭先だけのことはある。